私にとっての「明治学院の戦争責任・戦後責任の告白」とその後

松本　曜

この 3 月をもって、明治学院大学から神戸大学へ移ることになった。この明治学院に在職させていただいた 9 年間を振り返り、一番思い出すことといえば、やはり、最初の年、1995 年の 6 月 10 日にあった、中山弘正学院長（当時）による、「明治学院の戦争責任・戦後責任の告白」である。

6 月のその週は戦争を考える一週間として様々な行事が行われ、授業でも日本の戦争と戦後の問題を取り上げるという試みがなされた。残念ながら、私はそれには参加しなかった。それは、ちょうどその週、神戸大学での集中講義に出かけたために一週間授業を休講にしたからだ。といっても、その年に教えていた英語の授業（あるいは専門の言語学の授業）でどのように日本の戦争の問題を取り上げればいいのか、すぐには考えがなかったので、たとえ授業があったにしても特に何かをすることはなかったかも知れない。

そういうわけでその週日の諸行事などには参加できなかったが、土曜日の午後に行われた「戦争責任・戦後責任の告白」には出ようと、土曜の朝、急いで新幹線に乗り、荷物を持ったままチャペルに駆けつけて、何とか出席することができた。

「私は、日本国の敗戦 50 周年にあたり、明治学院が先の戦争に荷担したことの罪を、主よ、何よりもあなたの前に告白し、同時に朝鮮・中国をはじめ諸外国の人々の前に謝罪します。…」聞いていて、なぜか涙が止まらなかった。日本が何を行い、その中での明治学

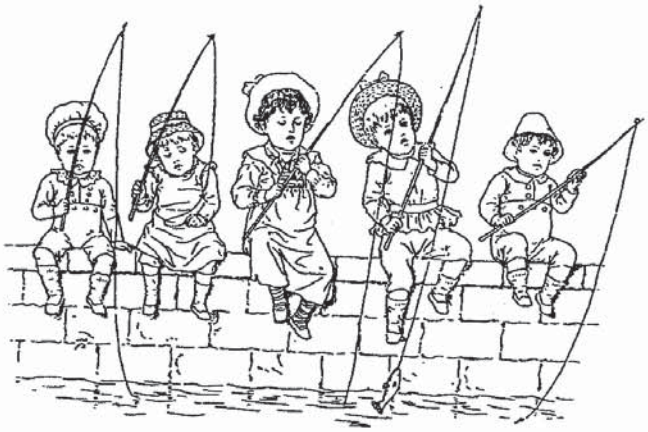
院はどのようにしたのか、また、それをキリスト者としてどのように受け止めればよいのか刧告白文に表れた罪を見る目の真剣さと、生きて働く神にあくまで従う態度には襟を正さずにはいられなかった。それと同時に、心の中にあることを愛の神に告白することができるキリスト者であるということのすばらしさ、また、その信仰に立つ教育機関のすばらしさを覚えずにいられなかった。

さて、その年の夏、敗戦 50 周年の 8 月 15 日を、私はかつての占領地でアジア諸国の人たちに囲まれて過ごすことになった。私はウィクリフ聖書翻訳協会という団体の活動に多少関わってきたが、そのアジア地区夏季言語学講座の中で授業を担当するために、一カ月シンガポールに滞在したのだった。この講座は、将来アジア諸地域の諸部族の言語に聖書を翻訳する者が、その準備の為に言語の分析方法を学ぶ講座である。私が担当したのは「意味論」だった。受講生は、モンゴル、韓国、日本、台湾、香港、フィリピン、シンガポール、インドネシアから集まっていた。そこで迎えた 8 月 15 日は、昼のチャペルの時間にアジアの過去、現在、未来について祈る時を持った。

その次の日曜日のこと、シンガポールの日系教会の礼拝に参加し、そこで会った人から、予期せぬことを耳にした。私が明治学院大学の者だと言うと、「明治学院ですか。こちらの新聞にも載りましたよ」と言って、「告白」に関するシンガポール誌の記事を見せてくれたのだ。そして、いわく「すばらしい。私はこの記事を読んで心の中にもやもやしていたものがすっかり晴れた。このことを学院長さんに伝えてほしい。」そして、さらに勧めてくれたのが、滞在中に戦争記念館などを回ってみてはどうかということ、そして、シンガポールの歴史の教科書に日本の占領時代のことが詳しく書かれているので、読んでみたらどうかということだった。

その時、一つのアイディアが浮かんだ。シンガポールの歴史の教科書は英語で書かれている。英語の授業でテキストとして使えるのではないか…。そこでいろいろな書店回って教科書を探したが、どうしても見つからない。帰国直前に、シンガポールの出版社に直接連絡して、なんとか一部手に入れた。入手したのは History of Modern Singapore (Longman Singapore)で、全体約 180 ページのうちの 1/4 ほどが日本の侵略と占領に当てられていた。

その翌年以来、英語のリーディングの授業を担当した際、5 つのクラスでこの歴史教科書をテキストとして使った。結果は非常に好評だった。かつての私と同じように、日本がシンガポールを占領していたという事実すら知らない学生がほとんどだったので、視野が広がったという感想が多かった。英語の授業としても、「興味を持って英語で読書する」ということができた授業であった。今までいくつもの授業に関して学生による授業評価を受けてきたが、英語の授業の中では、このテキストを用いた授業が今までで一番評価が高かった。

この執筆をしている 2004 年 1 月、日本の自衛隊は武器を持って戦争状態にあるイラクに入国した。神と人の前に、日本の国が正しく歩んでいくことを祈らずにいられない。

（まつもと　よう　所員・文学部教授）